

王様、私を食べてもいいですよ？ ～魔女の花嫁は喰
われない～

第一章 供物の夜

村を追われるようにして王都へと送られた夜、馬車の窓から見上げた月はひどく不気味な赤銅色に染まっていた。まるでこれから始まる不吉な運命を天が先に知らせているかのようだとなリアは思う。けれど不思議と涙は出なかった。魔女として忌み嫌われ、石を投げられパンひとつ買うことさえ許されなかったあの村での日々に比べれば、異形の王の花嫁として差し出されることなど何も恐ろしくはないとすら感じていた。

馬車の車輪が石畳を噛む音だけが延々と続く。リアは粗末な麻の外套を身にまとい、膝の上で固く組んだ指先を見つめていた。指先はかじかんで赤く腫れ、爪の間には畑仕事の土がこびりついている。これが花嫁の手か、と自嘲の笑みがこぼれた。

王都に近づくにつれ、空気が変わっていくのを肌で感じる。村では嗅いだことのない、鉄と香辛料と何か甘やかな花の香りが混ざり合ったような匂い。馬車の窓から外を覗くと、遠くにそびえる黒い

城が月明かりの下で不気味な輪郭を浮かび上がらせていた。尖塔がいくつも空を突き刺すように伸び、その頂上には青白い光が灯っている。あれが、人ならざる王の居城。

リアの腹の奥がきゅっと縮まる。恐怖ではない。これは、長い間押し殺してきた何かが呼び覚まされる感覚。魔女として生まれ、誰にも愛されずただ死ぬのを待つだけだった自分の命に、初めて意味が与えられる瞬間が近づいている。

城の門をくぐるとそこには想像を遥かに超えた静寂が広がっていた。人の気配がまるでない。壁に並ぶ燭台の炎だけが揺らめいて、リアの足音だけが冷たい石畳に反響する。高い天井には無数の影が蠢き、柱の陰から何かが見つめているような気配がする。だがリアは足を止めなかった。もう後戻りはできない。いや、するつもりもなかった。

玉座の間へと通され、ひざまずくように促される。石の床は氷のように冷たく、薄い衣服を通して膝を刺す。顔を上げたその先に、あの方がいた。

人ならざる王——彼の姿を初めて目にした瞬間、リアは息をするのを忘れた。漆黒の長い髪月光を閉じ込めたような青白い肌、そし

て右目を覆う黒い仮面の下で深紅の瞳が静かに燃えている。彼は玉座に深く腰掛け、片肘をついてこちらを見下ろしていた。その姿はあまりにも美しく、あまりにも異形で人間の尺度では測れない何かだった。

「面を上げよ」

低く響く声はこの世のものとは思えないほど美しく、そしてどこかひどく孤独だった。リアは恐る恐る顔を上げ、深紅の瞳と視線を交える。心臓が大きく跳ねる。恐怖ではない。もっと別の、名づけようのない感情が胸の奥で芽生え始めていた。

「リアと申します」

震えながらもそう名乗ると王はゆっくりと玉座から立ち上がる。漆黒の外套が床を這うように流れ、一步ごとに空気が張り詰めていく。リアの前まで歩いてくると、彼は骨張った長い指でリアの顎を持ち上げた。その指先は氷のように冷たく、触れられただけで魂の奥底まで見透かされているような錯覚に陥る。

「おまえが、私の花嫁か」

「はい」

「私は人間を愛さない。それはおまえも知っているはずだ」

「存じております。けれど私は魔女です。人間ではありません」

その言葉に、王の指がぴくりと反応する。リアの顎を捕らえていた指が、今度はそっと彼女の頬を撫でるように滑っていった。その動きはまるで壊れ物に触れるかのように優しく、恐ろしいはずの異形の王が彼女にだけ触れ方を知らないかのような不器用さを滲ませている。

「ならば、私のものになるか。リア」

その声は命じるでもなく乞うでもなくただ闇の中で迷子になった者が差し出された手を確かめるような響きを帯びていた。リアはゆっくりと目を閉じ、その冷たい指先に自らの頬を寄せる。答えはもう、心の奥で決まっていた。

「はい。あなたのものになります」

その瞬間、王の深紅の瞳が大きく見開かれ何かがはじけたように

揺れる。彼はリアの頬に当てていた手を首筋へと滑らせ、そつと鎖骨のあたりをなぞった。その指先がわずかに震えていることに、リアは気づく。

「……ならば、今夜、おまえを私の花嫁として迎え入れる」

王の声が少しだけ低くなり、吐息がリアのこめかみにかかる。その吐息は凍えるように冷たいのに、触れられた肌だけが燃えるように熱い。リアは目を閉じたまま、ゆっくりと息を吐いた。これから始まる夜が、自分の運命をすべて塗り替えることを予感しながら。

第二章 花嫁の支度

王の命によりリアは城の奥にある寝室へと案内された。案内するのは顔のない影のような者たちで、彼らは音もなく歩きリアを広い部屋へと導く。そこは王の居室なのだろう、巨大な天蓋付きの寝台が部屋の中央に据えられ、黒い絹のカーテンが幾重にも垂れていた。床には深紅の絨毯が敷き詰められ、壁際には無数の書物が積み上げられている。

影の者たちはリアを寝台の端に座らせると手際よく彼女の衣服を脱がせていく。抵抗する間もなく麻の外套は床に落ち、薄い肌着